

市民参加の祭りにおける「伝統」形成とその創造 –盛岡さんさ踊りの事例から–

弘前大学人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース

岡崎栞奈

1. 研究概要

本研究では、岩手県盛岡市の観光イベント「盛岡さんさ踊り」を例に取り上げ、市民参加の観光文化における正しさの様相や、活動を重ねて生まれた伝統の形成過程とその実態について考察することを目的とした。

さんさ踊りは、岩手県内陸地域を中心に各地で多様に踊り継がれてきた「伝統さんさ」と、伝統さんさを観光用に踊りやすくアレンジした「観光さんさ」に大別できる。前者については伝統やオーセンティシティを検討した研究がある。また、後者については「盛岡さんさ踊り」の登場でさんさ踊りの伝承母体が町内会から職場社会に移行したことが指摘されている（大石 2007）。この盛岡さんさ踊りでは、市民はどのように観光文化としての祭りが作り上げ、実践しているのだろうか。本論では、盛岡さんさ踊り実行委員会と一般参加団体の参加者への調査から、盛岡さんさ踊りを組織する側の営みと参加者たちの関わり方を検討し、市民参加型の観光文化における伝統形成の過程とその性質を考察した。

2. 先行研究

本論では、まず文化の「正しさ」に関する議論を整理した。伝統はその担い手により「作られる」とする議論（大塚 2004）や、文化を「グローバルな流れ、人や資本やアイデアの移動の結果であり、運動、混合、ハイブリッドの産物」（E.M.ブルーナー 2007）とする議論等から、文化や伝統は変化するものであることを確認した。

また、重要無形民俗文化財に指定された岡山県の備中神楽（俵木 2012）、および岐阜県の中山太鼓（芝村 1999）に関する研究では、稽古を通じた参加者同士の知識の交渉や伝承者の記憶をもとに「正しさ」を発見し、それを伝統として記憶することを通じて歴史をつないでいることが論じられている。これらの事例は指定制度によって権威付けられた無形民俗文化財においても、正しさは普遍ではなく、変化し続けることを意味している。

一方、観光文化の伝統の形成を論じた研究は多くない。富山県の観光イベント「おわら風の盆」の研究では、観光資源化した踊りの正しさ、真正性をめぐって2つの団体が対立し、それぞれ正しさの基準を創出して伝承していることが指摘されている（田邊 2014）。観光資源化しイベント化した無形民俗文化財では、正しさの基準自体が現代に生成されていた。ここに挙げた重要無形民俗文化財や「おわら風の盆」の先行研究にみられるように、伝統は変化するものである。とくに観光文化では変化することが当然とする立場から、正しさを議論すること自体の重要性が下がっていると論じられている。

上記の議論を踏まえ、本論は観光イベントの盛岡さんさ踊りを取り上げ、市民が担い手

であるこの祭で正しさがどのように語られ、伝統が築き上げられるのかを検討した。

3. 調査方法

盛岡さんさ踊りは盛岡市中央通をメイン会場とした市民参加型の観光イベントである。毎年8月1日～4日の4日間にわたってパレードが繰り広げられ、サブ会場では伝統さんさ踊り競演会が開催され、伝統さんさを観覧することも可能である。

本研究を進めるにあたって、盛岡さんさ踊り実行委員会と一般参加団体に調査を依頼した。調査ではまず、盛岡さんさ踊り実行委員会を対象に、盛岡さんさ踊りで披露される5つの踊り「統一さんさ踊り」が創作される過程について聞き取りした。この調査から、盛岡さんさ踊りにおける踊りの正統性がどのような方法で担保されているか、また盛岡さんさ踊りにおける踊りの正しさとは何かという点を検討した。同時に、一般参加団体での調査では7月に行われた練習会の場に参加して、盛岡さんさ踊りの実際の担い手である市民たちの行動を観察するとともに、個々の市民がどのような意図や動機で参加をしているのかについて、とくに参加のモチベーションを中心に聞き取り調査をした。本論では、以上の調査内容を踏まえて、盛岡さんさ踊りに生まれた「伝統」の様相を検討した。

4. 調査結果

4-1 統一さんさ踊りの「正しさ」

盛岡さんさ踊り実行委員会（以下、実行委員会）では、「統一さんさ踊り」と呼ばれる盛岡さんさ踊りの「正しい」踊りが創作された過程を詳しく聞き取った。調査の結果から、統一さんさ踊りの「正しさ」は多岐にわたっていることが明らかになった。5つの「統一さんさ踊り」のうち1つ目から4つ目の統一さんさ踊りは、伝統さんさ18団体が構成される盛岡さんさ踊り振興協議会（以下、振興協議会）に依頼して創作していた。つまり、伝統さんさの要素を取り入れることで「さんさ踊り」を名乗るに値する「正しさ」を担保していた。しかし、2022年に創作された5つ目の踊りはおもに実行委員会が主体となって創作を進めた。つまり5つ目の踊りは、4つ目までの踊りとは違い、振興協議会に創作を依頼せず、実行委員会が創作したこと自体が正しさの根拠となったのである。このことは、伝統さんさの振りや動きを正統な手順で取り入れることだけが盛岡さんさ踊りの正しさを示す指標ではなくなったことを意味する。踊りのバリエーションが増えるとともに、継続的な実施主体である実行委員会自体が、盛岡さんさ踊りの「正しさ」を担保するようになってきたのである。

こうした「正しい」踊りの創作の一方で、実行委員会は盛岡さんさ踊りのパレードに賞審査を導入し、基準をもとにして踊りを評価している。しかし、披露される踊りの細かい部分まで厳密に評価する必要はないとも語る。踊りの型が人伝に知れ渡り、公式の踊りとは違った形で広まることも仕方ないという。実行委員会は本来的に踊りの型が人伝に広まるものであると理解しており、一分の狂いもない正確な踊りが議論の対象とな

ったのは DVD 等の映像資料が発達した最近の話であることを挙げる。踊りが正しいかどうかを判断するのは現代の視点に過ぎず、観光文化における正しさの議論は無意味であるとする先行研究と共通する意見を得ることができた。

4-2 練習会での調査

次に、一般参加団体での聞き書き調査から、盛岡さんさ踊りの実際の担い手がどのようにさんさ踊りを語るかを考察した。本論で調査対象とした団体は、会社組織に付属した団体で、参加者の大部分は社員とその家族から構成されていた。当該の団体は 2022 年で 45 回目を迎えた盛岡さんさ踊りのうち、第 1 回から継続して参加している団体である。この団体の構成メンバーである社員は、会社の都合による転勤が多い。長年にわたって継続的に参加できるメンバーは少なく、団体の構成員は頻繁に交代する。なお、会社の地域貢献の方針により、例年、新入社員が踊りに参加していたが、2022 年は新型コロナウイルス感染拡大への対策から経験者のみが参加した。

2022 年度の練習会はさんさ踊りの 1 ヶ月前週に 2 回開催された。筆者は全部で 9 回の練習会に参加し、指導側と参加者の二つの立場の語りを収集し、特徴をまとめた。

指導は、さんさ踊り同好会という社員と OB からなる組織が担当していた。おもに指導を担当するのは同好会員とその家族の計 5 名であった。運行責任者以外に太鼓や踊りにそれぞれ指導者がいる形式を取り、笛は自主練習で参加していた。さんさ踊り同好会全体を通して「揃える」ことを意識して指導している点では共通し、振り付けを揃えることや、隊列内での位置を揃えることなどが細かく指導されていた。一方で、指導者の好みの踊りは個々に存在した。実行委員会が公開している公式の踊りを意識して指導している人や、伝統さんさでの活動経験をもとに指導している人などがおり、指導者が参加者たちに教える踊りにはそれぞれの好みの踊りが反映されている。現状ではこうした踊りの多様性を許容しながら、練習会で踊りが伝授されていた。

また、参加者を経験者と経験が少ない人に注目すると、経験の多寡に限らず動機やモチベーションに差があった。盛岡さんさ踊りに参加することを名目上の目的に設定し、実際は友達に会う目的で練習会に参加する人がいる一方、技量の上達や地域貢献を目標に何度も練習に通う人もいた。参加者の練習会参加回数にも大きな差があり、最後の数回のみ顔を出すだけの人もいれば、実行委員会からもらった楽譜を持参して練習に参加したり、家や他団体で自主練習をしたりしている人もいた。このように参加を通して得たいものや、満たしたいものは各自で異なるが、目的の個人差が受け入れられ、練習会が開催されていた。

5. 考察

以上の調査結果を踏まえて以下 2 点を指摘できる。ひとつはこの団体が目的、好み、技量、モチベーションにおいて多様性を受け入れていたことである。もうひとつはこの団体

は多様性を受け入れるからこそ、変化し続ける「伝統」を養うことができることである。

指導者と参加者のどちらにおいても目的、好み、技量、モチベーションの全てにおいて差があり、団体が一つにまとまる上でその差が足枷となることはなかった。団体は個々人の事情や踊りの型を含めた多様性を受け入れつつ、練習を重ねて本番を迎えることに重きを置いた活動を重ねていた。

この多様性の容認は調査先の団体に限った事柄ではなく、盛岡さんさ踊り全体を通してみられるものだった。4-1 でみたように、実行委員会は踊りの善し悪しをコンテストという形で審査しながら、一方で統一さんさ踊りの創作過程や踊りの細かい部分に生まれる差を許容していた。観光として踊られる統一さんさ踊りは、一挙手一投足の正しさにそのアイデンティティを求めているのではなく、元の踊りを大きく逸脱しない範囲での踊りの多様性を許容し、団体全体として踊りが揃っていることを重視していた。つまり、盛岡さんさ踊りという市民参加型の観光文化は、多様性を特徴としていたのである。

一方、祭りが毎年続く上で多様性を許容する背景に、祭りの担い手が市民であることが挙げられる。4-2 で述べたように、市民という存在そのものが流動的で多様性を持ち合わせている。したがって市民によって構成される祭りも必然的に複数の差を受け入れて開催できている。盛岡さんさ踊りでは、担う文化の正しさよりも、練習を重ねて本番に参加し、「盛岡さんさ踊りの一部を担った」という意識を得ることが重視されている。市民参加の文化は参加者の手の届く範囲で正しさを得ようとする過程が何よりも有用だった。

以上にみてきた文化の伝統は、時代や社会的な影響を受ける。2022 年度は新型コロナウイルス感染防止対策が施行され、例年とは違う対応を多く求められた。このような変化は2022 年だけに起こったことではなく、これまでも盛岡さんさ踊りは新幹線の開通やギネス世界記録への登録など、社会の状況に対応しながらは続いてきた。今後も様々な影響を受けて変化を繰り返しながら、盛岡さんさ踊りの「伝統」は形成されていくのだろう。

参考文献

大石泰夫 2007 「盛岡さんさ踊り」考—イベント祭りと民俗芸能—『芸能の〈伝承現場〉

論 若者たちの民俗的学びの共同体』ひつじ書房、pp.199-226.

大塚英志 2004 『「伝統」とは何か』ちくま新書、p.15.

エドワード.M.ブルーナー(安村克己、遠藤英樹他訳)2007『観光と文化 旅の民族誌』学文社、pp.2-3.

芝村龍太 1999 「地域の活性化と文化の再編成—串原の組の太鼓と中山太鼓—」『ソシオロジ』44 巻1 号,pp.21-37.

田邊元 2014 「民俗芸能における真正性と伝承方法に対する一考察—おわら風の盆」のフォークロリズム的解釈を通じて」『現代民俗学研究』6 号,pp.59-72.

俵木悟 2012 「文化財/文化遺産をめぐる重層的な関係と、民俗学の可能性」『東洋文化』93 号,pp.177-197.